

建築家 黒川雅之さんが考える「最高」の建築は

肌感覚で「グツとくる」建築

直感で「いい」と思える
心地良さが求められている

日本を代表する建築家として世界の様々なプロジェクトに参画し、国内外を飛び回る黒川さん。建築界の最前線を知る彼が今、最高と感じる建築とはどのようなものだろうか。

「ホテルや美術館など、近年の大規模建築では、建築家はどうしても話題性のある、コンセプトの複雑な建物を設計してしまうことがあるし、そのような建物は訪れる側も構えてしまいやすい。しかし今最も求められているのは、訪れた人が実際に肌で『いいな』と感じられる空間作りです。旅先で『この街いいな』と感じるのは理屈じゃありませんよね？ その人は、その空間全体の居心地の良さを肌で感じているわけです。そういう肌の感覚を大切にして、むやみに空間を区切らず、むしろ周りの自然や環境と調和させることで、訪問者にとって心地よい一体感のある空間を作る。写真はそれぞれ異なるやり方でそういう空間を作り出している公共建築で、こういう建物には中々お目にかかれませんか。ぜひ実際に訪れて、その魅力を感じて下さい」

ホテルの「最高」

THE PULI HOTEL AND SPA

ザ・プリ ホテル アンド スパ (上海)

黒川さんが「ホテルの最先端が集う中国で最高のホテル」と太鼓判を押すのが、上海で初の本格スパを備えたホテル。「肌で感じる居心地の良さを、高いレベルで実現しています。その秘密はシンプルを極めたデザインと、“一体感”を感じる設計ですね。例えば①の長いロビーは外の自然がよく見え、エントランスカウンターの奥はバーになっていたりと、多様な空間が一つになっている。②や③のように部屋もアジア的な、自然との調和を感じる設計で過剰さがないので、実に心地良いんです」



写真：ザ・リーディングホテルズ・オブ・ザ・ワールド

美術館の「最高」

LOUVRE-LENS

ルーブル・ランス (パリ)

日本人の建築ユニットSANAAが手掛け、大きな話題を呼んだルーブルの別館。「保存のためには本来閉じた存在であるべき美術館を、あえて①のようにガラス張りにすることで、逆に周りの土地や自然、風土を美術館の一部として取り込んでしまった。②の絵画や資料などの展示も空間が広く、③のような彫像の展示も壁や仕切りが少ない。区切りが曖昧であることで、訪問者はルーブルという場所を、周りの自然とともに一体感をもって感じられる。これも肌感覚を大事にした建築の好例です」



写真：HEMIS/アフロ

「いい」っていう
肌感覚は理屈じゃ
ないんですよ黒川雅之
(76歳)

建築設計から工業化建築、プロダクトデザイン、インテリアデザインなどを幅広く手掛ける建築家。近年は活況を呈するアジアでのプロジェクトにも多く携わる。

